(一) 842号 【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】 THE MIIKE (毎月1日、16日発行) 昭和43年3月16日(土)

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話③3033番
③3034番
編集兼発行人 古賀 徳継
年間600円 送料共

おねがい

▼…組合員・家族の皆さん、どうか本紙にいろんなご意見や要望を寄せてください。機関紙〝みいけ〟をもっともっとみんなのものにしてゆきましょう!

春闘、第四次合理化ふくめ
四月上旬には実力行使
「CO守る会」結成にも全力

三月下旬、四月上旬は三池山元においても、全国でも、春闘のヤマ場をむかえる。山元ではCO患者の取り扱い「三池CO患者、遺族を守る会」の結成、第四次合理化阻止、国有化春闘の闘いが本格化する。

「CO守る会」の結成へ

組合側推せん医師団によって治療継続が必要とされた八十八名(二十四名は入院、六十名は通院)は、笹林公園、労仂会館を中心に三月一日より自主訓練に入った。このうち二十四名は、三池労組本部を改造してつくった病室で「合宿訓練」に入り、坑内、坑外訓練者は三月二十日よりそれぞれの転場につく。

一方、CO患者のとり扱いについては、当初労仂省は三池労組関係七十四名の患者について、半年から一年間のメンタル・リハビリテーションを行ない、その間一日六百十円の訓練手当を支給することを約束していたが、医師団の構成リハビリの期間、訓練手当を大幅に改悪してきている。(組合側医師はただ立会に、期間は六カ月に、訓練手当は四百八十円に)

三池労組は、あくまでも総評・炭労と連携をとりながら、CO患者を守る。(組合側推せん医師団の判断をつらぬく)

また、労仂省の態度がどうあれCO患者の治療を組合側医師団の判断通りつらぬき、また三井への責任追及をつらぬくため、全国に「CO患者、遺族を守る会」を早急に組織化しなければならない。

CO問題—合理化が生み出した結果に対する責任追及—を全国にさらにひろげることだけが、CO闘争の中に出てきた総評、炭労、三池労組という、われわれの体制内部・労仂運動全体の弱点を一つひとつ克服していく道となるであろう。

このために、まず三池労組内部でCO問題を全員のものにする努力をし、各地域で「守る会」の組織化にとりくもう。

第四次合理化阻止のたたかい

坑外転場の下請化、宮浦坑口の三川統合などを中心とした第四次合理化は、会社がCO患者の問題に「片をつけた」あとに出してきた石炭政策の具体化である。労仂者を犠牲にしてすすめられる炭鉱大合理化(抜本策の再検討)は、もはや絶対に許されるものではない。

昭和三十八年の第三次合理化にわれわれは「不調印」で闘った。これは「強行されても従わない」という構えであったが、第四次合理化は阻止する以外に、われわれの生きる道はない。

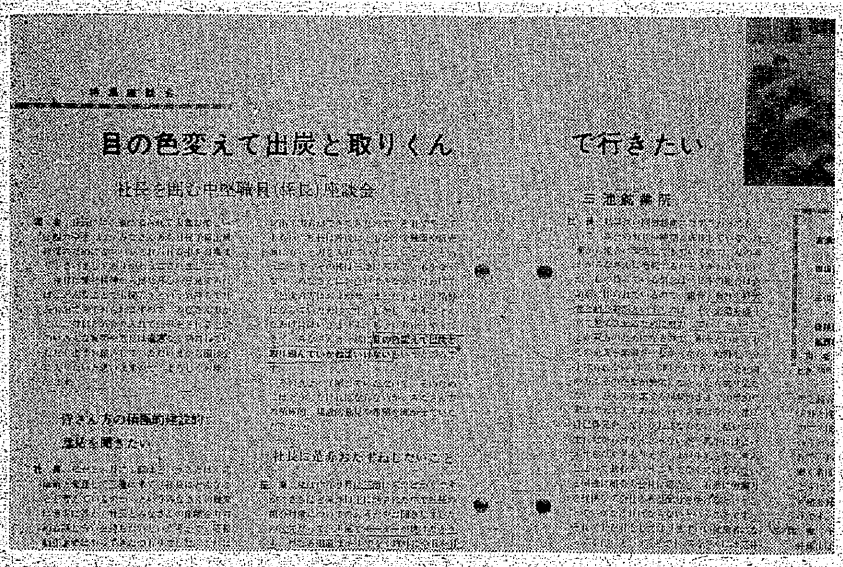
二月、三月のわれわれの闘いで第二組合員の中に不安が高まり、会社側は提案を一日のばしにのばしているが、これを阻止する道はわれわれの構えが「第二組合対策」から「第二組合員一人ひとりを組織化し、反対に立ち上がらせる」という積極的姿勢にならないかぎり達成できない。

このことは、一人ひとりの労仂者を「守る会」に組織化し、合理化に反対する闘いに共に立ち上がっていくこととまったく同一である。

長期抵抗路線の前進

昭和三十七年にわれわれが設定した長期抵抗路線は「全労仂者の階級的強化をはかりながら、労仂者の未来をつくる」戦略路線であった。われわれは過去六年の反合理化闘争の経験に立って、この「全労仂者の階級的強化」という抽象的な言葉をどのように具体化させるか? 長期抵抗路線の前進をはかりうるか否かの曲り角に立たされている。

三池内部においては、第四次合理化阻止を中心に、第二組合員をどう立ち上がらせるか(協力をうるか)炭労内部ではどう全組合員を国有化春闘に立ち上がらせるか外部に向けてはどう「守る会」を組織化して、反合理化闘争の拠点をつくるか?という課題に、四月の行動期間を目前に直面している。このためにも、いまこそ全組合員、家族の討論をふかめよう。



社内時報中の問題のページ

〝生産が上がらなければ保安など考えられない〟
倉田社長、係長らに語る

三井鉱山の転員を対象に発行されている社内雑誌「社内時報」二月号(二月十日発行)は「社長を囲む三池鉱中堅転員(係長)座談会」をのせているが、その座談会の表題が「目の色変えて出炭と取り組んで行きたい」となっていることからもわかるように、CO患者をマツ殺し、第四次合理化を強行しようとする会社の意図をこの上もなくあらわしている。その中から特徴的な発言を紹介しよう。

坑内火災ぐらいで昇坑させるな

まず最初に「社長にぜひおたずねしたい」と各係長がつぎのように語っている。

笹原係長(三川)「先だって三川鉱でモーターが焼けたときも単なる退避ばかりでなく坑外に全員を昇坑させてしまって、その上検診までさせたということは、組合に対する配慮からであったろうと思いますが、組合に対してこのような気がねをしなければならないという現状は、三井鉱山の基盤というものは薄氷の上に乗っているようなものだという感じがします。保安には十分気をつけなければいけないけれども、モーターの過熱ぐらいで昇坑させるようでは労組に対しての態度は積極的ではないんじゃないかと思いますが」

保安を重視しすぎる?

彌吉係長(鉱務部)「一体、三井鉱山は保安会社か生産会社かという疑問をたまに持つことがあるんです。炭鉱の特殊性ということもありましょうが、何か保安が先で生産は二の次になっているようです。保安というのは生産の前提として当り前のことですが、いつも保安が先にでてきてしまっている。やはり会社は石炭会社だという雰囲気を作っていかねばならないと思いますが」

倉田社長「保安と生産は車の両輪と同じく先後の差はないというのが理想で、どちらを軽んじてもいけないのだが、三池のように事故が重なってくると保安第一というのもやむをえないことでね、ただおじけてしまって生産が伸びないというのは困る。生産あっての保安であって、生産のないところでは保安なんて考える必要はない」

転員も千人クビ切る

永池係長(経理部)「いま三井鉱山に一番必要なことは、全員が〝やる気〟を起すということではないかと思います。人は減る一方だし、ポストはつまっている。給料は安い、福祉厚生施設は悪いでは、いま説得力にも欠けるということです」

倉田社長「(政府から)二百七十億円の肩代わりを受けるとき〝三井鉱山の経営をもっと合理的にやれ〟とか〝三池炭の販路を拡大し用途の技術開発をせよ〟とか付帯事項付きで許可になりましたので急に新規多角経営にも乗りだすことになりましてアルミ会社も当初資本金五億円で設立されました。とにかく、三井鉱山としては四十五年度までには転員も千人位減らすことに再建計画をしているので、関連会社にでてもらうことになります。

九・二八のCO患者はマツ殺

野見山係長(三川)「昨年九月の坑内火災罹災者は、三十八年のときと同様、今度も何かあるんではないかという期待感を持っていまも休んでいる者もいますので早く対策を立ててもらいたいと思います」

倉田社長「これは前回とはずいぶん事情が違っています。念のために身体検査をしたのをいいことにして休んだり、何かありはしないかという期待感を持っているようですが、医者のいうことは聞かない、会社の指揮下にも入らないということは許されないことですから、断固たる措置を取らねばならないと思います」このように倉田社長に対して、一人ひとりが「ご意見を拝聴」したあと「われわれの抱負と決意」として

「公休出炭してでもやり抜く」とか

「出炭確保を第一にやりたい」とか

「目標管理の再認識をしたい」

などと、各係長が「忠誠」をちかっている。

〝三井の末路みとどけたい〟
—あるお好み焼き屋のおばさんの話—
青婦部討論集会での百田さんの発言から

三池労組青婦部は三月十日三川支業で討論集会をひらいた。これはCO闘争、第四次合理化反対闘争への青婦部の総決起をはかるものであった。

ここで紹介するものは、そのとき三川支部の百田○○さんの発言からとったものである。

「私の知ったおばさんに県境でお好み焼き屋をしている人がいる

この人は私にこんな話をした。

『私の主人は三池闘争の千二百名でクビになった。闘争中はクビ切り反対で一生懸命闘った。いざ闘争が終ってクビになったら、男というものは意気地がないもので、大牟田をのがれて郷里の鹿児島に帰って一旗あげようといいだした。

私は三井がいる大牟田で一旗あげるとなしいわんとネとケンカして大牟田で食い抜くようにとこの店をはじめた。

しかし、やっぱり男というものはイクジなくて、大牟田では長生きしきらんで、ととう早死にしてしまった。

私は一人になってしまったが、この大牟田の片隅で食い抜こうと思っている。

いまはこんなに肥っているので好きな酒を焼酎に切り替えていますが、店に毎日座っていて三池労組の人がたべにきて、いろいろ話すのが楽しみです。

私は長生きして三井の末路をみとどけたい』

私は〝三池の闘い〟の練習などで遅く帰ると息子が〝ヤメロ〟という。

とくに第四次合理化がでて、なおさら〝会社を辞めろ〟といいますが、このおばさんの話をきいて争うハラをきめました」

※ ※ ※